

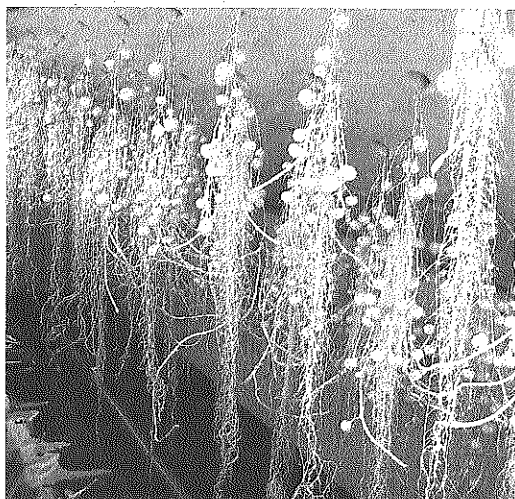


ジャガイモを増産するため、空中で種芋やその原種を栽培するエアロポニックスの導入が、中国などで広がっている。日本でも研究開発が進めば、高品質のジャガイモを短期間で増産する技術として普及するかもしれない



空中栽培の普及加速

宮城大学特任教授 石井勇人氏



エアロポニックスで増殖中のジャガイモの種芋
(ピーター・ファンデ・ザンゲWPC会長提供)

い。
エアロポニックスは、養液を含む微細なミスト(霧)で満たした空間に、根の部分を素を直接取り入れるこ

とで根が活性化する。

つり下げて増殖させる。根を養液に漬ける水耕栽培と異なり、空気に露出するため、酸素を直接取り入れることができる。その種芋が配布されれば、品種の管理や生産の効率化が進むだけでなく、品質のばらつきが抑制され、流通の円滑化も期待できる。

中国では、2008年の四川大地震で壊滅的な打撃を受けた産地を再生するため、被災地に種芋を短期間で供給できる技術としてエアロポニックスが注目された。世界銀行からの資金援助と国際ポテト会議(WPC)などの技術支援により研究が加速し、種芋の増殖速度と生産量が向上。病気に強く、土壌を健全に保ち、水を節約し、生産効率が向上することから、アフリカなど中国以外のジャガイモ産地でも、実用化が進んでいる。日本では、ジャガイモは野菜(根菜)として扱われているが、海外では主食としての側面があり、ジャガイモの増産技術への期待が強い。ただ、ジャガイモは高温や乾燥に弱く、冷涼な地域が栽培適地だ。地球温暖化の影響で収量が低下する恐れがあり、干ばつや洪水の被害も増えている。

ジャガイモ増産狙う



水面には抜けた草が確認できる

アイガモロ

- 水位は5～10センチ
- 苗の活着する日々に投入
- 1日の使用時間までが目安

は、導入が広がる背景を、販路。農家から、抑草効果や使売から3年目で認知が進んでいきたことや、モデルチェンジで性能が向上し、価格面で製品の魅力が上がったと分析。旧型より価格を抑え、希望小

後を目安に投入してほしい。